

## 編集後記

昨年3月交流協会へ出向後、早いもので第2回目の「編集後記」執筆の番が巡ってきました。本来の趣旨であれば、その号の目玉記事や取材のこぼれ話、寄稿者へのコメント等を記すところですが、ここでは「最近の台湾事情について」を私の所感とさせていただきます。

昨年12月所用で台北に出かけた時のことですが、当地は沖縄より南西に位置し、台湾北部は亜熱帯に属しますから東京ほど寒くはなく、薄手のコート1枚くらいを羽織れば良いくらいに思っていましたところ、あいにく雨模様が続いたせいか市内は意外と肌寒く、夜になれば10度前後くらいまで冷え込み、最初の晩のホテルでは寒い思いをしました。エアコン設定を20度に設定しても温風がなかなか出ないこともあり、寒いなど感じながらも重ね着して寝ました。聞くところによれば、台北のホテルには冷房用のエアコンはあるものの暖房は完備されていないホテルもあるとか、意外に感じました。さすがに次の日(夜)は我慢できずフロントを通し電気ヒーターを搬入してもらい安堵したことを思い出します。

たまたま滞在期間中は雨模様が多かったわけですが、街に出れば通勤・通学等にスクーターを利用される人が多く、小雨煙る程度では雨合羽を着て颯爽と走るライダーや、雨具を身にまとった女性を後ろに乗せる人もいたり、さすが台湾人のバイクにかける情熱というか生活全般の移動手段として利用する心意気というのを感じました。確かに都市部のほとんどには二輪車専用レーンや狭いながらも駐車場もあり、点から点への移動にはスクーターはどの交通手段よりも手軽で便利なのでしょう。

そこで台湾におけるバイク事情というのを調べたのですが、ナンバープレートの色によりバイクの大きさ(排気量)が決まっており、一般のスクーター(250CC未満)は白色、中型(250CC~549CC)は黄色のプレート、大型(550CC以上)は赤色です。通常、バイクは交差点において対向車との衝突を避ける目的で法令により2段階左折しなければなりません。但し、車と同じく大型バイクのみ直接左レーンから左折できます。街では手軽な交通手段として圧倒的に125CCクラス前後のスクーター(台湾製が2/3)が多いのですが、価格等も手頃ということで一般市民に利用されています。日本で人気の高い大型バイク(550CC以上)ともなると、台湾では一部の有名人や富裕層の乗り物らしく、一般庶民にはまだまだ高嶺の花らしいです。大型バイクの輸入自体の解禁が2002年のWTO加入以降であり、2003年から大型バイクの完成車の輸入が始まり、大型バイクは輸入車であるため、関税も高く日本で購入する新車価格の2倍前後かかり、一部の高速道路(国道:有料)は走行不可等、交通法規上の制約も多いため、一般市民にはなかなか定着しない乗り物のように思われます。日本の倍倶人(ライダー)のように全国津々浦々を自由に高速道路・フェリー等を利用してのツーリング旅行、高速SA等でのライダー仲間によるバイク談義ができるようになるのは、まだ当分先のようなようです。

(経理部長 高田 明)